

## 主峯宗密の「知」の思想について

小林 圓照

### 序

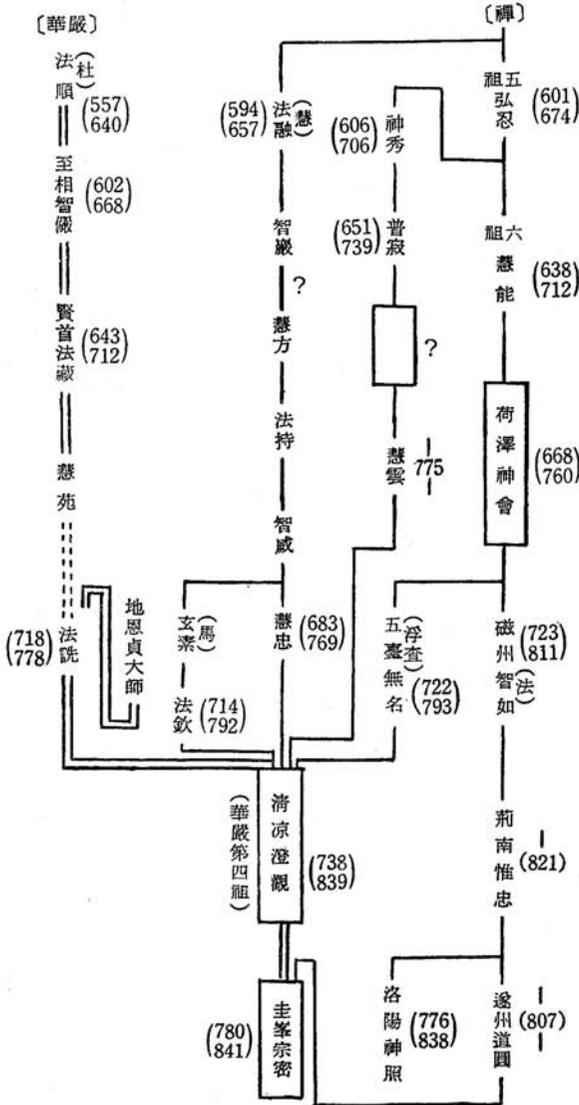
主峯宗密禪師は、中唐に於て教と禪の一致論を提唱した特異な思想の持主として、よく知られ、又、從來の空門的な禪流に對して、圓融門的な思潮を加えた。換言せば華嚴を以て禪を組織した、主要な一人として華・禪思想史上、その意義を見る事が出来る。このような華禪融會の思想の中核であり、且、宗密がその立場とする荷澤禪の禪理として「知之一字衆妙之門」<sup>(1)</sup>と主唱される「寂知」の思想についてその一端を考察しようと思う。

宗密の思想的な背景を調べる上で、法系譜を見ると、禪に於ては、荷澤神會の系統を嗣ぎ同時に中國華嚴宗の第五祖でもある。神會は、當時盛んであつた離念を説き疑心の修定に重きを置く義福、普寂らの神秀系の禪を極力排撃して「無念<sup>(2)</sup>宗、無作爲<sup>(3)</sup>本」を以て禪の正統と主張するのであるが、宗密の承けた荷澤禪は神會の資、智如より惟忠、道圓と相承されたものである。

宗密は若くして經論を讀み、儒學に専心した後、惟忠、神照の各師に謁し、元和二年（八〇二）遂州道圓に師事した。この間に圓覺經を得て悟る所があり、法順の法界觀門をも必要としたと傳えられる。次で清涼大師澄觀の華嚴經

疏及び演義鈔を弟子の靈峯より得、欣然として深く澄觀を歸依し、元和六年（八一二）三十二歳で入門、その華嚴を繼ぐのである。

神會・澄觀・宗密の譜系



次に澄觀と禪との関係を見ると、慧忠、法欽より牛頭禪を、慧雲より北宗の玄理を承けたと傳えられるが、法脈と

圭峯宗密の「知」の思想について

しては浮查無名を繼ぎ荷澤禪に透徹するものである。(4) 彼の答順宗心要法門の中に神會の無住心體、即ち靈知不昧とし「心心作佛、無<sub>二</sub>一心而非<sub>三</sub>佛心<sub>一</sub>、處處證眞、無<sub>二</sub>一塵而非<sub>三</sub>佛國<sub>一</sub>」(5)と華嚴の立場を説いているが、澄觀は北宗の離念と南京の無念を靈知に於て融會する所に華嚴の圓融無礙を明かすのである。この立場は更に、宗密に至ると、圓覺經を基礎とし、神會の寂知と華嚴の性起に通ずる圓覺を以て、教禪一致を體系づけるのである。

荷澤禪と稱される法系に於て、神會・澄觀・宗密は、その宗趣をよく顯わしているが、三者に一貫した「寂知」の思想の過程を中心に見て行こうと思う。

註(1) 華嚴經疏一五(大正藏三五・六一二C)演義鈔三四(大正藏三六・二六二a)

圓覺經大疏上之三(續一・十四・二一一三〇左上)同疏鈔一之上(續一・十四・三一二一三右下)

禪源所詮集都序(大正藏四八・四〇五b)禪門師資承襲圖(續二・一五・五―四三六右下参照)

宗鏡錄三四(大正藏四八・六一五b)參照

(2) 神會和尚遺集―胡適校―(卷三―一七五・一七六)

(3) 荷澤大師顯宗記(景德傳燈錄三〇、大正藏五一・四五八C)

(4) 宋傳五(大正藏五〇・七三七)景傳一三(三〇二)傳法正宗記七(大正藏五一・七四九―七五一)

(5) 答順宗心要法門(續一・二・八・四―三〇三左下)

## 一 神會の「知」

神會の禪の立場は、「金剛般若波羅蜜、最尊最上最第一」と提唱される如く、般若波羅蜜に依る「無念」の直證にあつた。その般若波羅蜜は能く一切法を攝し、一切行の根本であり、「一切諸佛從<sub>レ</sub>中出」と説かれる。(1) このような神會の立場に、所謂「知」の思想を求めるならば、無念に於ける般若本智の構造の上に見出されるであろう。即ち

然此法門、直指契要、不假繁文。但一切衆生、心本無相……心自無物、即無物心、自性空寂。空寂體上、自有本智。謂知以爲照用。故般若經云、『應無所住而生其心』應無所住、本寂之體。而生其心、本智之用。但莫忘意、自當悟入。<sup>(8)</sup>

と神會語錄にある如く、金剛般若經の『應無所住而生其心』と言ひ清淨心の構造を證據として、『空寂體上、自有本智』とか「不作意即是無念。無念體上、自有智命、本智命即是實相」又「本寂體上、自有般若智能知」、  
「無住體上有本智、本智能知」等と表註されるものである。故に「知」とは、無念に於ける、本來空寂體上の般若本知としての照用、即ち、般若の靈明性、觀照性であり、正覺の本源に外ならない。この「寂知」は般若寂體上の自有であるため、緣起を假らずして能く知る（頓）もので、緣起に依つて次第（漸）に得るものではない。神會は「出世間不思議者、十信初發心、一念相應、便成正覺。於理相應、有何可怪、此明頓悟不思議」とし、頓悟を出世間の不思議と呼ぶが、「念不起」を坐、「見本性」を禪とする如く、行は理（寂知）の頓悟に於て見られる。ここに北宗の凝心的修定、用心等は障菩提とされる譯である。亦「夫學道者、須頓悟漸修……」。と説かれる所の「漸修」も直了見性に依つて自然に智慧が漸々増長する事を指している。但、本性清淨體不可得なるを見する所に萬行俱備し、最上乘の道が示されるのである。<sup>(9)</sup>

このような無念の「寂知」の構造を基礎にして、定慧の等覺、眞空妙有の相即、涅槃と般若の因果不二、自性の三學等も理解される。

哲法師問、云何是定慧等義。

答、念不起空無所有、名正定、能見念不起、空無所有、名爲正慧。即定之時是慧體、即慧之時是定用。即定之時不異慧、即慧之時不異定。即定之時即是慧、即慧之時即是定。何以故。性自如故、即是定慧等覺。<sup>(6)</sup>

と説くように、定慧は寂體が定に於て、知用が慧として、性自定たる無念底に體用相即する。無念の正定とは「不用心、不看靜……一切妄想不生」であり、正慧とは空寂體上の本智である。そして、この無念としての一行三昧、即ち定慧無分到なる般若行に至つて「如實見者了達甚深法界……見無念者恒沙功德一時等備」とされ、又「是知即定無定、即慧無慧。即行無行」とも述べられる。

無念爲宗無作爲本、真空爲體妙用爲用。夫眞知無念非想念而能知實相……(中略)……湛然常寂應用無方。用而常空、空而常用。用而不有即是真空。空而不無便成妙有。妙有即摩訶般若、真空即清淨涅槃。般若若涅槃之因、涅槃是般若之果。般若無見能見涅槃、涅槃無生能生般若。涅槃般若名異體同、隨義立名。故云法無定相。涅槃能生般若即名眞佛法身。般若能建涅槃。故號如來知見。知即知心空寂、見即見性無生。知見分明不一不異。故能動寂常妙、理事皆如如、即處處能通達、即理事無礙。

と顯宗記に明示される如く、真空と妙有は無念の實證に於て體用相即し、妙有は摩訶般若、真空清淨涅槃と解される。更に、般若若涅槃の因として、その無見にして能く涅槃を見、涅槃は般若の果として、その無生の所に能く般若を生ずるが故に、無念の眞如としての如來知見の上に涅槃・般若が同ぜられる。或は、戒定慧の三學に就いても「有作三者約諸惡不作等云々。無作三者妄心不起是戒、無妄心是定、知無妄心是慧。自性三者謂空寂照……」とする三種のうち、寂知の立場から、空(戒)寂(定)照(慧)の自性の三學に立つのである。

「知之一字衆妙之門」と言う一句は神會錄等に直接に見出し得ぬが、「知」の思想の本源は、以上のような無念としての「本智能知」の構造に於て、充分把握できる譯である。

註(1) 神會和尚遺集(卷三ノ一八〇・一八一)「…(崇)遠師問、何故不修餘法、不行餘法、唯獨修般若波羅密法、行般若波羅蜜行。和尚答曰、修學般若波羅蜜者、能攝一切法、行般若波羅蜜者、是一切行之根本。金剛般若波羅蜜、最尊

最上最第一、無生無滅無去來、一切諸佛從中出。

- (2) 同(卷一一〇二)
- (3) 同(卷一一〇一・一一三・一二四)
- (4) 同(卷一一〇〇)
- (5) 同(卷三一七五・一七六・卷一一二・一一三)
- (6) 同(卷一一二八・一二九) (卷一一三四參照)
- (7) 同書(卷一一五〇・一五二) 神會禪師語錄(一四・一六參照)
- (8) 顯宗記(四五八c・四五九a) 頓悟無迷般若頌—胡適校—(卷四參照)
- (9) 圓覺經大疏鈔三下(續一・一四・一一—二八—左下) 行願品疏鈔一(續一・七・五—四〇七・右上下) 六祖壇經(大正藏四八・三四二bc・三五八bc參照) 荷澤神會大師示業(景傳二八・大正藏五一・四三九c第一問參照)

※ 以上の如き神會の思想は壇經の般若第二、定慧第四に同ずるものとして注意參照されねばならぬ。

## 二 澄觀の「知」

法藏の性相融會、事々無礙の立場に對して、澄觀は終頓二教としての同教一乘の論立に依つて性相決判、事理無礙を顯わすが、就中、頓教に就ては、慧苑の見解を排し法藏の意に従つて「寄無言之言、直詮三言絶之理」とし、達摩の以心傳心は正しく頓教として南北兩禪共にそれに攝容して理解された。<sup>(1)</sup>更に別教一乘の組織中、第四周遍含容は法界觀門の周遍含容觀として事々無礙であり、そこに十玄も開かれるが、それは無障礙法界の立場では終頓の三教を融攝する。<sup>(2)</sup>その融攝の意味は、更に事々無礙の法性融通門、即ち緣起に對して性起の立場とされ、事々無礙に於て法界を統攝する總該萬有の一心を指向する。法界とは「無名相中強爲立名是曰無障礙法界」であり、一心とは「寥寂虛曠冲深包博總該萬有即是一心體絶有無相非生滅」<sup>(3)</sup>と説かれる立場である。一心即ち法界にして心體念を離ると

し、唯一圓覺にして形奪變亡せば覺所覺を離ると言う所に、一心に於て頓圓綜合する華禪一致の思想の基礎が認められる。

神會が寂知を示すに「卽定無定卽慧卽行無行性等ニ虚空ニ體同ニ法界」とか「心歸ニ法界萬象一如遠ニ離思量ニ智同ニ法性」、「無念卽是一念一念卽一切智」等と説かれ、或は「花嚴云…十信初發心金剛慧便成正覺、菩提之法有ニ何次第」、「出世間不思議者、十信初發心一念相應便成正覺、於理相應…是故經云、不退諸菩薩其數如三涇沙二心共思議亦復不能知…」等と表現される所に華嚴思想への契機が見られる。卽ち無念本智の寂體照用の一如としての「知」は理智不二の一念相應であり、便成正覺と一心法界に同せられる。澄觀は無住心について「以レ心知レ如」も「以レ智了レ心」も境や心に住するものとし「住ニ無住」も住と斥け「不生於心ニ則無住心生卽此契理亦名ニ方便」を無住の窮極と示して「無念知則無間矣」と説かれる。卽ち一念相應の無念の知を「瞥然起心」とせば止を失つて北宗の意に相違し「暫時忘照とせば觀を泯じて南宗に背反するのであつて、「寂照雙流卽無ニ斯過」として南北兩禪を會する所を禪の本意とされる。

彼は華嚴經問明品の諸佛智自在三世無所礙以下、文殊の偈頌を釋するに、「八明ニ知體相」として、知卽心體、了別卽非眞知。故「非ニ識所ニ識」。瞥起亦非ニ眞知、故「非ニ心境界」。心體離ニ念卽非ニ有念可レ無、故云「性本清淨」。衆生等有或翳レ不知、故「佛開示皆令ニ悟入」。卽體之用、故問レ之以レ知。卽用之體、故答レ之以レ性淨。知之一字衆妙之門。若能虛レ己而會便契ニ佛境。

とされ、諸佛智自在の「智」は所證の法に對して能證を示すが、「今直語ニ靈知真心異乎木石」とするのは能所證を通ずる心體としての「知」である。かかる眞知を考察するに、「了別」「了見心性」などが眞知に非ずとされるのは、南宗の病（無念不契の了到知見）を遺るもので「眞知唯無念方見」とされるべきである。或は瞥起も亦眞知に非

ずと言うのは北宗の「以三不起心爲三玄妙」とし一以三眞知一必忘心、遣照言思道斷矣」とする弊を除くものである。此の如き無念の眞知は勝天王般若の經證に依つて、「且以三無念心一稱此而知、卽同三佛知見」。經云、如實卽無念、是用三無念心一見聞覺知覺三知一切事法一心常寂靜卽如來藏」と明示される。「心體離念、非三有念可三無」とするを以て南北の病弊を除いて二宗が變會されるが、それは北宗の離念を破す南宗に於ても、念の無とすべきなき性淨と言う所に會せらる。更に法華經の「開示悟通佛知見」については、北宗五方便の開智慧門の不起不動を示し、南宗では「本智能知」「佛心是衆生心」に依つて解かされる。以上によつて、南宗の「知卽心體」(卽體之用)と北宗の「性淨」(卽用之體)とが、智と理の無二而二として神會の寂知の立場に統一される。

澄觀に於て荷澤禪の立場を直載に表註するものは答順宗心要法門である。

至道本三乎其心、心法本三乎無住。無住心體靈知不昧、性相寂然。包三合德用三該三攝内外、能廣能深。<sup>(9)</sup>

と説かれ神會の「空寂知」は不可得の寂體としてよりは、「本智能知」の照用面が靈知不昧として顯示される。しかも「有證有知」とせば有地に没し「無照無悟」とせば空門を蔽うもので、但「雖三卽心卽佛一唯證者方知」とすべきである。「但一念不生前後際斷」とか「直造心源無智無得」と示すのは見性、性淨などの了別作爲に墮すると排す譯であり、そこに「照體獨立物我皆如」として法界が現證される。神會の空寂心體たる一心は「若無心忘照則萬累都捐、若任運寂知則衆行圓起」とされる如く「本智能知」を契機として、總該萬有の一心を指示する。「以三知寂不二之一心一、契三空有雙融之中道」ものである。神會の無念は「一念卽一切智」とし一念相應に於ける初心正覺であつたが、澄觀に於ては更に「心心作佛無三一心而非佛心、處處證眞無三一塵而非佛國」。としての法界圓成であつて、理事無礙なる禪行が既に事々無礙の證果を示すものであつた。

三聖圓融觀門の理行果の構造の上でも毘盧遮那の果海に理行も包攝される意味に於て禪の寂照の體用は華嚴の一心

「空界の理智不二なる果現を證すものとして基礎づけられる。南北兩禪の融會の根據もここにあつた。

澄觀の「知」の思想は神會の寂知の自性性起用たる能知を契機として、靈知不昧として展開され華嚴の總該萬有の一心に同じて把握された。「知之一字衆妙之門」と言うのは、思想的には澄觀にあつて、よく顯わし得たと思う。

- 註(1) 華嚴玄談五(續一・八・三一・二五一・二五二)
- (2) 普願行願品疏一(續一・七・四一・二五〇)
- (3) 玄談七(續一・八・四一・二八四)
- (4) 行願品疏一(二四九)
- (5) 同 二(二五八)
- (6) 顯宗記(四五九 a) 遺集(一九三)・神會大師示衆(四三九 c)・神會禪師語錄(六四)・(四一) 遺集(卷一・一〇〇)
- (7) 演義鈔三三(二五六 b)
- (8) 華嚴經疏一五(六一二 b ~ c)・八十華嚴經一四(大正藏一〇一六九 a 參照)
- (9) 演義鈔三四(二六一 b・二六二 a)
- (10) 答順宗心要法門(三〇三左下・三〇四右上)・五臺山鎮國大師澄觀答皇太子問心要(景傳三〇、大正藏五一・四五九 a b 參照)
- (11) 三聖圓融觀門(大正藏四五・六七一 a b c)——二聖法門既相融者則普賢因滿離相絕言沒同果海是名毘盧遮那。

### 三 宗密の「知」

澄觀の華禪思想の内に、神會の「寂知」の展開を見たのであるが、それを繼ぐ宗密に於いても同じ立場から出發する。彼は教禪一致の體系を組織するにその基礎を圓覺經に求めた。即ち「心寂知自之圓覺」彌滿清淨中不寄他故徳用無邊皆同一性性起爲相」と言う如く「圓覺」を介して「寂知」の荷澤と、性起の華嚴を會す所に新しい面が見

られる。

圓覺經の十の教起因縁を述べる中に、「一顯示因行有本故」「二泯絕果相成圓故」「三決擇悟理應修故」と示される。即ち圓覺は(一)一切如來の本起因地(文殊の立場)として因行の根本なると共に、(二)佛の究竟の圓照清淨なる果相に外ならず、(三)この因果一體なる圓覺は悟理應修としての普賢行に於て決擇される。(一)は如來藏的な終教の立場、(二)は圓教、(三)は理行との頓教を指示する如くである。この經は廣義では「具終頓此二正見空宗相宗、亦該小乘兼含圓到、通決悟修義意、具足頓漸……」<sup>(3)</sup>と示されるが正旨は終頓二教にある。又、教體としては理(歸性門)に對して理事無礙(無礙門)と見做される。「如來藏宗則正攝終頓二教。二教俱以眞淨一心究竟實理故、但佛說時儀式不同故成兩教」<sup>(4)</sup>とせば此經は眞性を宗とする如來藏緣起宗を宗趣とされる。宗密は頓教の立場を「頓教以顯性即爲破相又次纏染本空即是法身、則具第二宗及第四宗一分法義」<sup>(5)</sup>と示しているから眞空無相宗にも攝せられ如來藏緣起宗でもある。更に頓教に於て「頓指絕對中道眞性」とか「顯一眞覺性」とする逐機顯體の頓に對して、「華嚴經初成佛時稱性一時頓說理事本末始終因果窮理盡性」と説かれる化儀の頓とは圓教であつた。ここに頓と圓とは究竟眞實の性徳に於て體を出せば則ち同じだが、名義、教門施設は別と言われる。頓教としての圓覺經に於て、如來妙圓覺心」等と示される所では圓教に通ずる(分攝の立場)と見られる。<sup>(6)</sup>

以上の如き頓教は禪に順じて理解されるならば理(歸性門)を教體とし如來藏緣起宗として性の立場を宗趣とし、更に圓覺經を介して、理に於て破相顯性の眞空無相宗(始教)に、性としては本起因地(終教)に、泯絕果相としては圓具德宗(圓教)に同ずるのである。かかる構造を基礎として教禪融會が論成される。

禪源諸詮集都序に於て、宗密は禪を「定慧通稱爲禪那」此性は禪之本源、故云禪源。亦名禪那理行者、此之本源是禪理、忘情契之是禪行、故云理行」。とする如く理行相參の旨に達すべきとされる。そして達摩門下展轉相

傳するものは「頓悟自心本來清淨、元無煩惱、無漏習性本自具足、此心即佛、畢竟無爲」を以て修する如來清淨禪であり、一行三昧、眞如三昧とし一切三昧の根本であり「若能念念修習、自然漸得百千三昧」とする。<sup>(7)</sup> まず「佛語」として萬代依憑たる教と即時度脫、就機玄通を宗とする「佛意」たる禪との相應契合について十所以を擧げ「須知經論權實、方辨諸禪是非、又須識禪心性相、方解經論理事」と言う觀點から、禪の三宗と教の三種を配對相符し總じて一味に融會せんとする。禪の三宗とは、(一)息妄修心宗は「背(泯)境觀心、息滅妄念、念盡即覺悟」と「遠離慣聞……心注一境」とを理行とする。(二)泯絕無寄宗は「凡聖等法皆如夢幻……本來空寂」を旨とし「無修不修」なる所の本來無事を證とする。(三)直顯心性宗は、一切諸法は唯眞性に外なく、眞性は無相無爲の故に凡聖因果善惡いずれでもなく、體は一切を離れているが而も即體之用として種々造作し能く凡聖を現わすと説く。この内、①「即今能語言動作、貪嗔慈忍：即汝佛性、即此本來是佛」とし「不斷不修、任運自在」なるを解脫とするのは洪州宗の立場である。②「妄念本寂、塵境本空、空寂之心靈知不昧。即空寂知是汝眞性、任迷任悟心本自知、不藉緣生、不因境起、知之一字衆妙之門……頓悟空寂知、知且無念無形、誰爲我相人相」と説いて寂知を理とするのは正しく荷澤宗を示すものであり、無修の修なる無念によつて寂照現前し應用無窮なるを眞證する。<sup>(8)</sup>

次に教の三種とは(一)密意依性說相教では、①人天因果教(人天教)と②斷惑滅苦教(小乘教)③將識破境教(唯識教)であり、③は禪の息妄修心に相當する。(二)密意破相顯性教は般若空觀の立場であり禪の泯絕無寄に同ずる。(三)顯示眞心卽性教とは「開示靈知之心卽是眞性、與佛無異」を旨とし禪の眞顯心性宗と全く同じとされる。更に此教の一眞心性(知)を以て全採し、全收して破相說相共に攝して、その了義たるを顯わす。<sup>(9)</sup>

三宗三教に於て說相から顯性への方向に意義を見出すとせば空有相對(一)と(二)、性相對(三)と(四)よりも空(破相)性(顯性)相對が重視され次にその十異を以て性宗が稱揚されるのである。かくて三宗三教は一味法として融ぜ



此（顯示真心卽性）教説、一切衆生皆有「空寂真心」、無始本來性自清淨（實性論云…、勝鬘云…）明明不昧、了了常知。盡未來際、常住不滅名爲「佛性」、亦名「如來藏」、亦名「心地」（達摩所傳是此心也）從「無始際」妄想翳之、不「自證得」一「著生死」。大覺愍之、出「現於世」、爲説「生死等法一切皆空」、開「示此心全同諸佛」。

と説かれる所にその意を見出すであらう。更に宗密は、出現品の破塵出經の喩を引證している。(3)性字體異では、性は靈明常住不空體である。文超の見解に従つたと見做される。宗密の「性起とは法界の性全體起つて一切諸法と成る」との見方は眞性湛然たる靈明全體卽用としてこの性に基づくであらう。(4)眞智眞知異では、空宗では分別を知、無分別を智とし智深知淺と見做すば、性宗の立場は「以て能證之智理之妙慧爲智、以て該於理智」、通於凡聖之靈性と爲知。知通智局」。とし知は能證たる智ではなく理智を通ずるとされる。宗密は知について「此言知者不證知」、意説「眞性不同虚空木石」故云「知也。非如緣境分別識、非如照體了達之智」。直是眞如之性自然常知。と説明し、起信論の「眞如者自體眞實識知」華嚴廻向品の「眞如照明爲性」等を證據とし、「智局於聖：知卽凡聖皆有、通於理智」とする智と知の分別は、澄觀の問明品、文殊偈頌の釋を祖述するものである。又實藏論の「知有有壞、知無無敗。（此皆能有無之智）眞知之知有無不計（卽自性無分別之知）」をも引證している。(6)遮註表討異では、遮註とは眞妙の理性を説くに不生不滅等の如く非を遣り諸餘を揅卻するものだが、性宗は「直示當體」の表顯の立場である。例せば知見覺性、靈鑒光明…等とする如きである。遮詞のみは尙、未了であつて「見今了然而知卽是心性」と認得せば遮表、時に臨むに任すべきとされる。圓覺經大疏の「心寂而知」を宗密は釋して「寂者卽是決定之體。堅固常定、不喧動不變異之義、…知者謂體自知覺、明明不昧、棄之不得、認之不得、是當體表顯義、非分別比量義」。と説くのもこの立場であらう。尙「寂而能知」の構造は、神會、澄觀の體（寂）用（知）一致の思想に從がうものであり、圓覺經の「圓覺普照（知也）、寂滅無二（寂也）」、瓔珞經の「等覺照寂、妙覺寂照」金光明經、

攝大乘論の「佛果無差別色聲功德唯如如(知也)及、如如智(知是)」などと説かれる所にその義を見出ししている。(7) 認名認體異では、喩えば清濁、止流で萬物を澆灌し萬穢を洗濯する功能義用を以て「水」だと名を擧げられるが智者は水の體を徴して「濕即是水」と剋體して示す様に、佛法に於ても、垢淨、凡聖に通じ、能く世間出世間の一切諸法を生ずるものは「心」だとされるが、智者は追究して「知即是心」と的示する。ここに「知之一字亦貫於貪瞋慈忍、善惡苦樂萬用萬義之處」。であり衆妙之門と言う意味に解される。宗密は達摩の「心」を以て神會が「知」と説いた根據をここに置く。空宗は初學淺機に對して、隨言生執を遮す所に名を標す意義があり、性宗は久學上根に對して一言に體を直示するのである。(8) 二諦三諦異では、空宗は二諦に立ち、性宗は一切性相及び自體を攝して三諦とする。「一真心體非空非色、能空能色、爲中道第一義諦」と説かれ、天台の三諦、三觀、三徳としても示される。澄觀が「言止則雙忘智寂、論觀則雙照寂……以知寂不二之一心、契空有雙融之中道」と説く立場に通ずるものであろう。

禪の立場としては、達摩は文を揀んで「心」を傳え其體(知是心也)を默示したのであるが、荷澤の時に至つて宗旨の滅絶するを恐れて、「知」の一字を明言した所に、宗密はその歴史的必然性を見んとしている。この立場で禪の四宗を説けば、悟理に於ては、一切皆妄(北宗)、一切皆無(牛頭宗)、一切皆眞(洪州宗)、これに應ずる修行として、伏心滅妄(北宗) 休心不起(牛頭宗) 信任情性(洪州宗)とされ、荷澤宗は任迷任悟心本自知であり、寂知即ち眞性を理とし無念を宗とし無修の修である順性を行とする。更に四宗の禪理の深淺得失を辨明するに、一切差別の色相なき唯圓淨明の一摩尼珠を、空寂にして常知なる一靈心に喩えられる。それは隨縁としては「以三體明(知)故、對外物(諸緣)時、能現(分別)一切差別色相(是非……種種事數)」であり、不變の義に於いては、「色相自有三差別(起滅明珠(能知之心)不三會變易)」とされ「靈明知見與黑暗無明、雖即相違而是一體」の場合に比せられる。

先づ(一)北宗は黑暗去却して明相出現を待つ立場とされ、(二)洪州宗は但黑暗に即して明珠であり乃至青黃種々に即す

ると言う。(三)牛頭宗は「明黒都無」「微體全空」とする。(四)荷澤宗の見解は「諸の色相の處に即して、一一に但淨圓明の珠體のみを見れば、即ち珠にして惑わずとする、即ち「正見<sub>レ</sub>黒色<sub>二</sub>時、黒元不<sub>レ</sub>黒、但是其明<sub>一</sub>」。とし、有無自在にして、明黒融通するのである。次に明珠は能現の體にして、永に變易なし」と言うこの荷澤の立場から他の是非を判ぜば、(一)北宗は「擬<sub>三</sub>離<sub>レ</sub>黒<sub>レ</sub>覺<sub>レ</sub>珠<sub>一</sub>」の弊に墮し易く、(二)洪州宗はその後學者が「專記<sub>三</sub>黒相<sub>一</sub>、或認<sub>三</sub>種種相<sub>一</sub>、爲<sub>三</sub>明珠<sub>二</sub>」と言う如く、明珠を認得する上に明證性を缺く。即ち隨縁の面での混同、不變の面では諸色を認知し得ず、明珠の相を局限する恐れをもつ。(三)牛頭宗では「色相皆空之處、乃是不空之珠」を悟らずとされる。荷澤の「知」の立場から「將<sub>レ</sub>前望<sub>レ</sub>此<sub>一</sub>」(揀)せば前三宗は未だ理を見ないもので荷澤と廻異するが、「將<sub>レ</sub>此攝<sub>レ</sub>前<sub>一</sub>」(收)せば荷澤の見解にて「黒即無黒」とするは「一切皆無」(牛頭)に、「黒即是珠」とするは洪州宗に、通ずるものであり、荷澤宗を以て三宗全同の立場を得る。<sup>65)</sup>

宗密にとつては寂知は種々の遮遣の詞を收束して一切を攝盡するものであり、洪州宗にも靈覺、鑒照等と表顯の立場もみられるが、愚者は智る無く、心無記なる時は照鑒といえぬ點で「知」と同ぜられないとする。空寂知とは「空却<sub>三</sub>諸相<sub>一</sub>、猶是遮遣言」、「寂是實性不變動義不同<sub>三</sub>空無<sub>二</sub>」(知當體表顯義不同<sub>三</sub>分別<sub>一</sub>)とされ眞心本體を指す故に、地位に隨つて名義は殊なるが發心より成佛に至るまで貫通すると見られる。即ち了悟の時に約せば理(寂)智(知)であり、發心修行の時は止觀(止息塵緣、契<sub>二</sub>於寂<sub>一</sub>、觀照<sub>三</sub>性相<sub>二</sub>眞<sub>レ</sub>於知<sub>一</sub>)とし、任運成行の時は定慧(因<sub>三</sub>止緣<sub>一</sub>而心定者而發<sub>レ</sub>慧、慧者)であり煩惱盡き功行圓滿し成佛する時に於ては菩提(此翻爲<sub>レ</sub>覺即是知)、涅槃(此翻爲<sub>二</sub>寂滅<sub>一</sub>即是寂)と知無分別<sup>66)</sup>であり煩惱盡き功行圓滿し成佛する時に於ては菩提(此翻爲<sub>レ</sub>覺即是知)、涅槃(此翻爲<sub>二</sub>寂滅<sub>一</sub>即是寂)と擧げられる。更に宗密は「用」に就いて二義を擧げる。「眞心本體有<sub>三</sub>二種用<sub>一</sub>一者自性本用、二者隨縁應用<sup>67)</sup>」とであつて、洪州宗が語言動作等を以て心性を顯わすのは隨縁應用のみを驗わす比量顯に過ぎぬが荷澤宗は「心體能知、知即是心」と知を以て心を顯わす現量顯に立つ。そこに寂知として自性本用が示される。

宗密にとつては、圓覺とは「直示法體」であつて、涅槃の佛性、法華の一乘妙法、淨名の不可思議解脱、金剛の般若等は圓覺門中差別の義とされる。禪の離念無念も此の中の遮過拂迹の意にすぎぬとされる。圓覺門とは、文殊章の「善男子。無上法王有<sub>二</sub>大陀羅尼門<sub>一</sub>名爲<sub>二</sub>圓覺<sub>一</sub>流出一切清淨眞如菩提涅槃及婆羅蜜教授菩薩<sub>二</sub>」を示すものである。一切染淨諸法皆、圓覺より流出し、百千萬法悉皆悟入する所に「門」の義があり、圓覺の塵沙徳用を指示するのである。圓覺經は理智を宗とすると言ら立場からは「理智者、理是本覺、智是始覺、始本不二爲<sub>二</sub>究竟圓覺<sub>一</sub>、非<sub>レ</sub>但以<sub>二</sub>諸法寂滅虛凝無爲無相<sub>一</sub>便爲<sub>レ</sub>理也、亦非<sub>レ</sub>但以<sub>二</sub>能證能了除闇明等<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>智也。又理是智之道理、智是有理之智」と説かれるが、これらは、荷澤の「知之一字衆妙之門」であり「寂知」に同せらるべきものである教の立場からは圓覺は果相に於ては華嚴の立場、因性に依れば如來藏を指す。これは又如來藏宗の立場として、圓覺經は在經因性の終教位を兼ね、法身果上の性起圓教を宗とするものであつた。「知」（眞心）は澄觀に於て「總該萬有卽是一心」であり、宗密のこれを五教に釋する所の頓教の泯絕染淨の一心に對し圓教として示すものである。澄觀は能（普願行願）所（法界）契合に於て、因門可説の上で、無分別智をもつて理法界を證するに五門を開くが、宗密では第三能所俱泯が頓教の證道とされる。「泯」には互奪と本心頓現の二意を持つが、宗密の立場は理と智以前に靈知頓現を示すのである。かくして禪は因性、逐機に、華嚴は果現、化儀に、宗と教として區別されるが、圓教である化儀の頓に於て因は果海を該ね、果は因源に徹する所に、頓教としての禪は包攝され、教禪一致が完成されるとする立場が説かれる。

- 註(1) 圓覺經大疏(序)(續一・一四・二一・一〇左下)  
 (2) 同 大疏上之一(一一〇右上下)  
 (3) 同 上之一(一一〇左上)  
 (4) 同 大疏鈔三下(續一・一四・三一・二七四左下)  
 (5) 同 大疏上一(一一六右上下)

- (6) 同鈔一下(二一八右下) 同三下(二八一左上) 同二上(三三二右下)  
 (7) 都序(三九九a・b)  
 (8) 同(四〇二b・c四〇三a)  
 (9) 同(四〇三a)四〇五c)  
 (10) 同(四〇六a)四〇七a)  
 (11) 同(四〇一c參照)  
 (12) 都序(四〇四c)、原人論(大正藏四五・七一〇a參照)  
 (13) 行願品疏鈔一(續一・七・五—四〇〇左上)  
 (14) 都序(四〇四c・四〇五a)  
 (15) 大疏鈔一之上(二一三右上下)  
 (16) 都序(四〇五b)  
 (17) 承襲圖(四三六左上下)四三七右上下)  
 (18) 同(四三七右下左上)  
 (19) 同(四三七左下)・大疏鈔一之上(二一三右下參照)  
 (20) 大疏上之二(二一右上下)・圓覺經(大正藏十七・九一三b) 大疏上三(一三〇右下)  
 (21) 大疏中之四(一六七右下)・鈔十之下(四三八左下)  
 (22) 行願品疏鈔二(四二三右上下)  
 (23) 同(四二九右下左)

結

神會に於て般若本智の觀照性を指す「知」が、澄觀によつて靈知不昧として、一心法界の證とされ、禪の南北を融會する根據とされた。更に宗密に至つて「寂知」は一切を攝盡し凡聖眞妄に貫通すると説かれ、自からは「若一向揀却緣慮妄心、色相塵境、頓凝虚空等法、偏立寂知、而爲究竟者互未圓通」<sup>(1)</sup>と排してはいるが、「本智能く知る」と言う意義は、その絶對性を強調する事に依つて抽象者な面が出て來る。宗密に於ては「知」は華嚴の性起の立

場であり、圓覺でもあつた。空宗に對して眞性として性宗の理を示し、禪の四宗の辨別では、特に洪州に對する荷澤の心體表顯の立場として稱揚された。宗密は圓覺經普願章の四病を以て洪州宗は住、北宗は滅、牛頭宗は止として各宗の缺陷を指摘するが、荷澤宗の「知」が了別的なものへ指向する意味では作病の恐れなしと言えない。後代「知」の思想が批判される點がここに見られ、誤解も生じて来る。四明知禮は靈知を「無修發之相<sup>(4)</sup>」とし、大慧宗杲は黃龍死心が「知之一字衆禍之門<sup>(4)</sup>」と説くとし、鳳潭は「知之一字此是清涼圭山病在<sup>(5)</sup>」と批判する。しかし、無念の直證としての了了常知なる照用に依つて、正覺の明證性が伴なう所を、「知」とするには、何ら排せられるべきものではないであらう。

\* 今は神會・澄觀・宗密の「知」の思想の流れを理の一面から見たにすぎぬが次に残る問題として

- (一) 「知」と頓漸悟修との問題、(二) 他の禪思想に比較しての意義、(三) 後代の教・禪・儒・への影響と云う點が際せられる。  
 (二) に就いては禪思想史研究(第二)(鈴木大拙氏著)の第六、第二、慧能以後の禪、(三)(四)節に説かれている。  
 (三) に関しては、「南都佛教」第三號(一一一〇)荒木見悟氏、「宗密の絕對知論」に詳説されている。

——二祖微妙大師をして「此心一たび了して曾つて失せず人天利益す盡未來云云」と頌せしめたものは、無相大師の『本有圓成佛』なる一闢に報ゆる所であつた。「本有圓成」とは正しく靈覺妙明の眞體、所謂『了了常知』に外ならぬが、禪の正道としては『爲甚還作迷倒衆生』と問う所が出發點であり、常にその新しい現量底を我々に迫まるものでなければならぬと思う。——

註(1) 圓覺經大疏三下(二七九左下)

(2) 圓覺經(九二〇a・b)

(3) 十不二門指要鈔(大正四六・卷下七一三b)

(4) 法集別行錄入私記(六八左)

(5) 圓覺經日本訣(上) 日本大藏(三〇)

主峯宗密の「知」の思想について